

問曰く。真宗といふ。
 答曰く。此れか答釋を爲さんとするに當り
 て余は豫め兄等と相約し置くべき事に於て、深く
 其の必要なるものなり。何ぞや、曰く左の如き二

條件あり。

(一) 其一に曰く。余が以下兄等の來問に向て、酬答せんとする所の言々、皆之れを平素の信念より開襟せんとす。是の故に佛祖の聖敎量に依順したる他は、一

白毫館員 井口俊了
 鹿野久恒



(二)

も私意を焉れに加ふる事を爲さざれば、兄等も亦聖訓として之れを迎へて信受奉行し、それを以て余輩の心行と兩々對照して、相共に眞理の公道を併行かんと欲する事はれなり。

其二の曰く。宿因すでに厚薄の別あり。余が今陳ぶる所に於て、兄等若し直ちに之れを信行する事能はざれば、寧ろ之れを疑謗せらるべし。然れども兄等確然記憶して忘失する事なかれ、夫れ信順と疑謗と、二ながら佛陀の慈光に包容せられて離脱する能はず、否な離脱せしめたまはざれば、畢竟同一法味樂を取るに至らざれば止まざるものと。

問て曰く。豫約の二條、謹みで之れに服從せん。請ふ前問に答ふる所あれ。

答て曰く。眞理を顯示して、以て世闇を開曉す、即是れ眞宗なり。

問て曰く。簡短の答語よく要を提く、蓋し是れ遺漏なからん。但、恐る、未熟者ありて、眞宗の意義を委悉するに困まんかを。請ふ最も懇懃に、且つ平易に、之れか敷衍を興へられんことを。

答て曰く。所謂眞理なるものは、彼れ必ずしも遠からず、吾人みな共に其眞理海中に游泳しつゝあるなり。而して之れを證悟したる人あり、又之れを了知

(三)

(四)

せざるものあり。證悟にまた満分あり。分證者中、黙するものあり、語るものあり。黙するものは、其獨りを慎むに潔くして、未だ他を率ひて、同一の光明界に遊はんとする勇氣なし、之れを謂て聲聞根性とす。又上に反して、利他度生に重きを置き、自樂を忘れて世を救濟す、即ち是れ菩薩の行動なり。是等二類は、眞理の幾分を明らめたれば、すてに聖者に攝す。而も猶ほ未だ自利々他圓滿なる大聖とは云ひ難し。乃ち今謂ふ所の眞宗なるものは、自から圓明に眞如法性を證得して、また能く世の痴闇を開曉する、二利の体用に於て缺くる所なき、悲智圓滿の清淨者に依

(五)

りて、稱へ興こされたるものを指す。問て曰く。敢て此の事を爲せしは誰ぞ。答て曰く。吾佛釋尊、大寂定に入りて、無量壽經を説きたまひたるもの是れなり。事既に祖訓に出たり、即ち教卷の初に曰く、『大無量壽經、眞實之教、淨土眞宗』と。是れ明かに釋迦か大經を説きて、眞宗を樹立し玉ひたりといふ祖判ならずや。問て曰く。彼の釋迦を敬信して、完全圓滿なる大聖と爲さんとする乎。答て曰く。何そ其問の鹿漫なる。常に吾佛教に向て攻難を企てつゝある無宿善外道すら、尙ほ且つ我

(六)

釋迦文佛を崇拜して、亞細亞三大聖(釋迦、孔子、基督)の隨一と爲すにあらざや。况んや末流を汲で、其本源を討尋せんとする佛縁深厚のものに於てをや。

問て曰く。釋迦其佛にあらざるも、佛説の眞實を掲げて、世に臨む人あらば、亦許して眞宗と謂ふべき乎。答て曰く。然り。

問て曰く。果して然らば、傳教弘法等、何人を問はず、我佛教の眞意を開示して誤まつことなくば、通じて皆眞宗といふも、亦妨げならん乎。

答て曰く。夫れ然り、而して嚴正に、淨土眞宗の名義を具して、此大乘相應の地上に現出し、吾人が爲めに、

(七)

壯麗圓滿なる一大宗家を建設したまひたるは、實に見眞大師に於て之れを見る。故に余輩は信ず、遠く彼の月支に於ける、三千年前現出の眞宗は、釋迦に依りて樹立せられ、また近く此日本に建設せられたる眞宗は、吾が見眞大師に依りしものと。更に茲に之れを謂ひ換ゆれば、彼れは有相好の佛に依りて、開け、此れは無相好の佛に依りて設けらる。

問て曰く。前述に由りて之れを觀れば、賢首華嚴經に依りて、十玄緣起を顯揚し、智者法華經に依りて、三千實相を説示する等、亦是れ通じて眞宗といふも、蓋し妨げなきものゝ如し。而して正しく眞宗を開設

(八)

したまへるを見真大師なりとす。その通別二者の異同關係、邈として辨得し難し、更に之れを詳説せよ。答て曰く。姑く二種の方軌に由りて、以て之れが解釋を試みんとす。曰く横簡撰擇。曰く豎尋攻究。前者は、横こに内道外道を并へ置き、通總に吾佛教の諸乘を許して真宗と稱し、以て彼の外教諸宗派に簡別せんとす。換言すれば、佛法外道を對照して、大にその真理と非理とを褒貶するものなり。後者は、佛法部内の精研にして、所謂真理中の攻究と知れ。而も尙ほ且つ淺より深に進み、麤より密に入り、いよく探尋して益々その精妙を覈求し、(しばらく四重を設く以下出す所の如し)茲々に

(九)

始めて、完璧なる一大真宗を見んとするものなり。問て曰く。先づ第一法に由る簡別を示せ。答て曰く。内外兩教の委細を歴盡せんとすれば、則ち日も亦足らず。是の故に今は概括的に内外二大教として、之れを横こに并べて簡別せんとするものなり。幸に吾か佛門中、確然たる其簡別の標準ありて存す。それにまた數種あり、今しばらく、人の知り易きに隨はんとして、佛學初門の小乗家所順の法則を出すべし、即ち三種の法印なり。一に諸行無常印、二に諸法無我印、三に涅槃寂定印是れなり。且つ此三つの者、大乘家も亦許して、彼の外道に簡別する標

幟とす。乃ち余輩は思惟す、此れに由りて内外二教を大判せんこそ適當なれど。

答て曰く。看よ彼の炎々たる猛火を。前炎忽ち去りて後炎之れに繼ぎ、刹那も底止する所なし。彼れ諸行無常の現象なるを、而も痴情謂て永續の炎ありと爲す。滔々たる流水も、亦彼の理を證明しつゝあり。すなはち前水跡を過去に没せは、後水俱時に未來より現す。羊眼以て之れを見れば、一水の長へに存するが如くにして、其實一瞬する能はざる者なり。此現量に由りて測定するときは、有爲の諸法、一も斯の天則に漏るゝものなし。若し之れを小にしては

吾人の心身、また之れを大にしては三界の依正、彼等みな是れ刹那生滅と斷ずべし。宜なるかな佛陀は、諸法に命ずるに行の名を以てすること。(生、住、異、滅の四相に迎送せらるるを)此尺度なく、牽強附會して、筆舌勉めて天堂を構ゴツドを設く。若し夫れ百歩を譲りて一時是れありとするも、彼れ畢竟有漏輪廻界なる六道中の隨一たるを免れざれば、今の諸行無常の印中に入りて攝す。是の故に彼の存在も亦た電光石火のみ。茲に於て佛家に談する寂光土の如き、又安養界の如き、何の印中に入りて攝するやは深く考ふべき事なりとす。

以上しばらく第一印に就て簡別したり。すでに諸
行の無常なるを知らば、他に之れが常一主宰者の復
たあるべからざるや。昭々火を見るよりも明かなり。
應に知るべし。諸法は唯、因縁に由りて起盡する事を。
問て曰く。炎々燃へ上ほる火、又滔々流れ行く水の
生滅無常なる事、既に命を聞く。然れども余輩人類
正に活動業作しつゝあり、豈に之れを謂て無我とす
ることを得ん乎。

答て曰く。試みに彼の車を見よ、人若し其轂、輞、輪、輻
等に對し、終日之れを算へて、而もついに其車体を發
見する事なし。又是れと同時に吾人各自々身に向

て、深く觀察し來れば、則ち亦た一種の無輪車なるこ
とを悟るべし。骨肉を解き去り、色心を剖き來らば、
すなはち一人として實在するものなく、唯、是れ因縁
和合の一假人にてありき。既に活人と信じたりし
もの猶ほ斯の如し、况んや此他、山の高き、水の長き、其
聲、其色、みな因縁の集合によりて、しばらく其相、用を
現起するのみ。其体の無我なること、畧して前陳し
たるものに準知すべし。然れば則ち、天地百年すべ
て夢幻、三界萬事みな泡沫にして、一の真人實物ある
ことなし。况んや其天地人物を創造し、復た賞罰す
る、神我自在者ありて存するといふに於てや、故に

余は斷して之れを非理とす。以上は第二印に依りて簡別するものなり。是の如くにして、觀知すでに達すれば、主觀的我執頓に滅盡して、心邊寂靜なり。此時客觀的法空のきよく霽れ亘りて、無我の心月圓かに輝やくなり。宜なる哉佛陀は之れに印するに、涅槃寂靜の名を以てすること。若し之れを云ひ返せば、所觀の法もと清淨なれば、則ち能觀も亦無我なるなり。絶て情執の痕跡だも留むることなし、否止むる能はざるなり。眞法既に然り、而して能く軌範となりて、能證の妙智を喚起す。彼れ即ち無聲にして雷轟するものなり。彼れの雷轟に由りて、迷夢乃

ち覺む。覺むれば、則ち無我の眞月正に清輝を放ちつゝあり、此れは是れ佛乘初門の當意説明に過ぎず。尙ほ一層之れが上へに三乗家の説あり。且つ其上へに一乗の説あり。聖道の上へに淨土の説あり。淨土門中、眞あり、假あり。再言すれば、小乗の上へに大乘あり、權を廢すれば實現はる。無涯の眞如海を、其源底に説及はんこと、今の盡す所に非ず、否余輩迷夢の相到すべきものに非ずと知れ。且らく第三印に對する、余輩の信念を宣ぶる事爾り。以上の三法印は佛法の標幟にして、若し之れに違背するものは、縱令佛法なりと自稱するも、斷じて其眞

法に非らざるを知る。また佛法の姓名を稱へざるも、此三法印を佩來ることあらば、すでに是れ無名の佛敎なり。

問て曰く。古來斯の如く、内外二大簡別を爲したるものありや。

答て曰く。善導大師は、佛陀が嚴に、彼の實我實法を執する邪網を擲裂して、真空妙有の青白法を、光闡したまひたるを慶讚して、『九十五種皆汚世、唯佛一道獨清閑』と云ひたまひしは、印度に於ける内外簡別の典型にして。また圭峯禪師が孟蘭盆經疏に、『良由真宗未至、周孔且使繫心』と云はれしは、支那に於ける内外

對判の一例なりとす。吾邦是等簡別すべきもの、中古其數ありて、近來漸く多きを加ふるを覺ゆ。茲に於て、余輩は信ず、將來の宗教界、ますます多事なりと。又思考しつゝあり、真理は最後の戰勝者なりと。然れば十字架前に膝を屈すと、無我の眞月を觀賞するとは、しばらく各自の撰擇に委す。

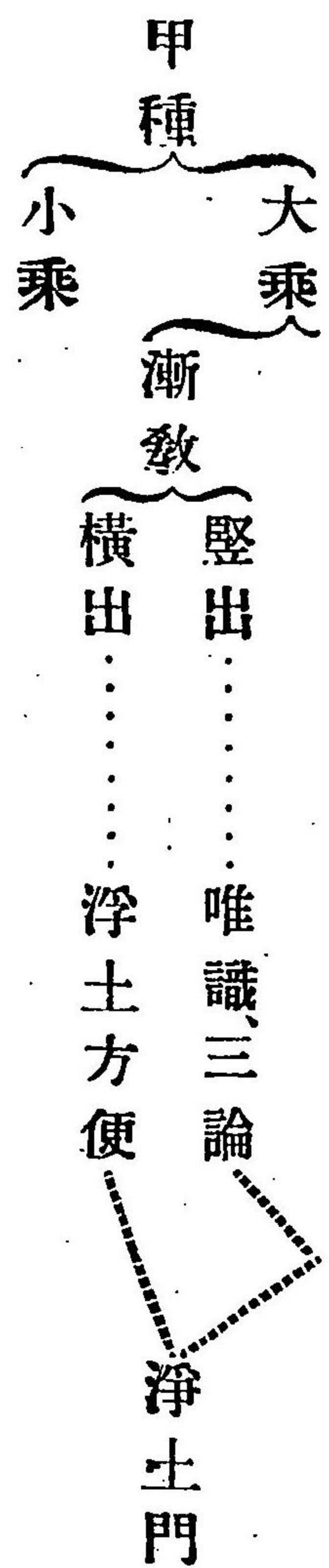
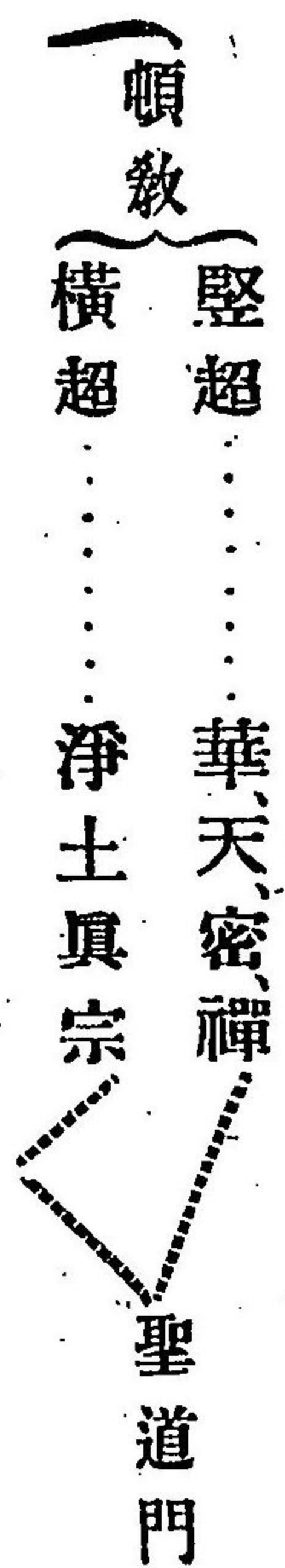
問て曰く。第一法の簡別にて佛説に基くものを通じて眞宗と稱するは、三法印を具するに由るとは、其旨趣方に瞭然たり。請ふ今より第二法に由る辨述を與へられよ。

答て曰く。以下佛法部内の攻究なれば、即ちすこし

く規律を立て、教判。法相。安心の三門を開きて、爲めに之れが辨釋を試みんとす。即ち堅尋なり、是れ細釋なり。この尋釋は其法体に於ては、一も取捨すへきことなしと雖とも、而も其見解の淺深、鹿密を精研すへき必要はあるものなり。中に就きて先づ

教判門

に入りて、見真大師が佛一代諸教の上へに、如何に圓滿なる真宗を建設したまひたるかを見んと欲せば、左の畧圖に就きて、其位置を知得するを便なりとす。之れにまた甲乙二種あり、已下圖說する如し。



此れを相對、隨他意、方便門と名く。其故は兩々比肩せしめて、未だ廢立の判定を施さざればなり。是れ廣く未熟の機を網羅し置き、漸次佛意を領得せしめんとするものにして。彼の聖道門、諸宗派、及び淨土方便餘流、なほ應分の得益ありと許すを以てなり。而して横堅は他力自力の異名、超出は頓漸の代目なれば。則ち聖道門は自力の修功を以て、この世界に於て、頓に漸に成佛するものを指し。淨土門は彌陀

願力に歸して、彼の淨土に往生して、胎生化生あるを云ふ。再言すれば、堅超は此界頓證にして、堅出は次第悟入を云ふ。又横出は淨土漸進の成佛にして、横超は往生即成佛の速證なり。

以上出したる所のものを、すなはち二雙四重の高判とす。但し小乗は斷證の方便に止まりて、究竟成佛の法にあらされは、たゞ所判に數へられて、能判の列に加はる資格なきものとす。

乙種 權假方便教……………聖道餘流
誓願一乘海……………淨土眞宗

之れを絶待、隨自意、實義門と稱す。それ絶待は一死

一活、隨自意は直ちに佛祖の眞意を顯示するものなり。即ち彼の光明淨土より、此の痴闇濁世に出現したまひたる、その目的を表明するものなり。是れ永く將來を救濟して、換休あることなき眞實法門なれば、之れを實義門と云ひしなり。

以上の二種は眞宗々祖の眞毫に依りて成れる、本典信卷及び愚禿鈔等の規定、すなはち大師高判の一斑を摘出したるに過ぎず。乃ち更に右の圖説を廣述するときは、大小頓漸、聖淨眞假の四重あり。而して皆佛法部内の簡別なれば、則ち四重互に能簡となり、また所簡となるも、各皆前出の三法印を具するもの

(一一)

と知れ。之れを小乘隨一の法義に依りて、その一例を擧げて示さん乎。彼の俱舍論なるもの、すなはち小乘法に屬して、諸大乘の爲めには、簡出せらるゝものなり。然るに此所簡小乘法にして、既に三法印を具足すること、以下云ふところを見よ。それ此論一部三十卷の所明に九品あり。前八品は廣く諸法的事を説き、(諸行無常印)第九の破我品は、専ら無我の理を明し、(諸法無我印)以て有漏無常の三界を蟬脱して、無漏寂靜の涅槃を証得せしめんとす、(涅槃寂靜印)今はその能證の智即ち無漏の對法を、一部の宗として之れを教ゆ。是の故に題して、阿毘(對)達磨(法)俱舍(藏)論と云ひしな

(三二)

り、(初甘露門すでに然り、他の大乘經論中、三法印を具するは、復た言を待たざるなり)。而して之れを精研するときは、是等小乘法、未だ眞宗と云ふへからず。所以は云何。佛陀興世の本意を、顯了したるものに非るが故に。凡そ諸佛の本願に総あり、別あり。その總願に曰く。衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願智、無上菩提誓願證と。是れもと本業璣珞經に出て、近くは往生要集に釋す。若しその別願に至りては、釋迦に五百の大願あり、藥師に十二の上願ある如く、諸佛各、別願を有す。中に在りて、優に諸佛世界に超出するは、阿彌陀佛の六八弘願とす。而して其願王と云はるゝものに言はく、『設我得佛。

十方衆生。至心信樂、欲生我國。乃至十念、若不生者、不取正覺。唯除五逆、誹謗正法』と。應に知るべし。佛陀の本意、總願に就くも、別願よりするも、ともに諸の衆生を率ひて、同一妙果を見んと誓はせたまふにあれば。彼の自身が欣趣するところの、單空涅槃、灰身滅智を以て足れりとする、聲聞、緣覺二乘法の如きは、佛之れを出生の本意としたまはさるのみならず、却りてまた深く厭嫌したまふところなり。又龍樹大士が後進の菩薩を痛呵して、若し趣寂を望まば、菩薩すでに死したるなりと。以て知る。經論ともに小乗は、顯了眞宗に非ざることを。以上略して大小

兩乘を簡了せり。

問て曰く。第二の頓漸對に就きて、簡別するところあれ。

答て曰く。それ大乘門中、三乗と一乗とに論なく、總へて佛が法界等流、(眞如法性のまゝを演出したまふをいふ)の說法を以て此大乘法を光闡したまふ本意は、たゞ一切群生をして、頓に漸に、畢竟平等一味の佛果に登らしめんと、無緣大悲を行ひたまふなり。凡そ物の爲めにするもの、必ず應に、智泉を沸騰して慈雨を敷散すべきなり。而して其慈悲に三緣あり。一に衆生緣、是れ小悲なり。吾人凡夫なほ一分之れを行ふことを得。二に

法縁、これ中悲なり。三界有漏の結使(煩惱をいふ)を脱却したる無漏の智海より、迷悟因果の法則に順應して、能く他を拔濟するものをいふ。二乗無學及び大乘の菩薩、多くは此慈悲に依る。三に無縁、即ち大悲なり、これを恩徳とす。それ佛陀とは、もと法性平等に体達して、智海の全性を修起したまへるものに名く。他語を以て之れを云はば、無縁の慈悲とは、眞如舉体の起動するものなり。活ける眞理なり。然ればすなはち、眞如法性の平等なる如く、十方の群生をも、亦平等に佛ならしめんとし、いふを以て、佛の本弘誓願とす。是の故に彼の五性各別を説きて、一切成佛を許

さず、三祇歴劫を教へて、是佛、即佛を談せざる等、みな眞宗にあらずとして、之れを權假方便なりと貶す。若し之れを前に圖出したる教判に照らすに、甲種相對門なれば、即ち漸教堅出に攝し。乙種絶對門にては、權假方便に屬す。彼れなほ歴劫迂廻の權教を免れされは、ついに今の所廢に歸す。

問て曰く。第三聖淨對に就きて、華嚴、法華等皆一乘眞實の法門なり、即ち是れを眞宗といふべき乎。

答て曰く。彼れなほ未だし。華嚴頓なりと雖も、二乘を漏して、如聾如啞の嘆を發せしめたり、豈敢て圓教てふ美名に酬答する、其實ありと云ふことを得ん

(八一)

や。法華自ら圓教と稱す、これ二乘を開會したるに因る。然るに彼れ亦人天をして、同一醍醐味を嘗むるに至らしめずして止む。焉んぞ知らん、別に平等攝化の彌陀弘願に於て、待つ所の本意なきにあらざるなきことを。然れば即ち、弘願念佛に歸入して、信念を増進すべきなり。

問て曰く。研して彌陀本願の下に來たる、今なほ簡別の必要ありや。

答て曰く。以下最も慎重に、最も緻密に、研尋すべきところのものどす。

問て曰く。何ものか非眞宗なる。

答て曰く。要門、眞門是れなり。此二門に就き、更らに分別すべきもの數番あれとも、共に完全顯了の眞宗に非ざれば、今は合して、方便假門と貶し、弘願他力の念佛に比して、その眞假を分別せんと欲す、これを謂て眞假對とす。法然聖人の傳へたまふところは、即ち撰釋本願なれとも、其門下西鎮者流は、親となく疎となく、みな要眞二門に出入して、未だ眞宗ならざるなり。是の故に吾か見眞大師、特に眞宗の名義を顯揚したまへり。

問て曰く。その事出て、何れに存す。

答て曰く。開宗の本典中、淨土眞宗なる、四字宗名を

(九一)

稱したまふこと、前後四回に及へり、請ふ以下これを引かん。教卷の初めに曰く『大無量壽經、眞實之教、淨土眞宗』と(即ち)これ依教分宗なり。依教分宗とは、今試に其語意を解ひて曰く。釋尊一代の上へに見るに、文殊普賢を正爲としたる華嚴にはあらず。又舍利弗、目蓮を目的とせし法華にもあらず。廣く十方諸有を色光の版圖に屬せしめ、正しく五乘(菩薩、緣天、上、人間)に心光攝護の益を與へんとして、大寂定彌陀三昧に入りて、其身、光顔巍巍たる報身の資格を具し、その意、欲拯群萌、惠以眞實之利にあるを以て、その金口に演出したまふところも、亦自ら自身が五百願にあ

らすして、全く彌陀超世の六八大願にてありき。此時の佛ありて、此時の經起る。換言すれば、釋尊が本懷を顯示したまひたるものを大經とす、此經教に基據して、特に淨土の眞宗を別立したまふ、或は略して眞宗と稱するなり。又曰く『謹按淨土眞宗。一者往相、二者還相。就往相回向、有眞實教行信證』と(即ち)是れ依教分宗別なるものなり。それ依教とは、釋尊一代初頓華嚴より、終圓法華涅槃に至る。中に就て出世の本懷を、直顯的に演説したまいたるは、獨り大無量壽經に在り。故に余前に佛が大經を説きて、眞宗を樹立したまひたることを云ひ。又乃ち我祖見眞

大師彼の眞宗に依りて、此眞宗を稱へたまふことを云ふ。而して此眞宗の教義。華天、密禪の普通眞宗に比して、大にその鹿妙の分るを見る、之れを教別といふ。是れ余が第七問答下に在りて、嚴正に淨土眞宗の名義を具して、此大乘相應の地上に現出し、吾人か爲めに、壯麗圓滿なる一大宗家を建設したまひたるは、實に見眞大師に於て之れを見ると慶讚せし所以なり。化身土卷に曰く、『信知、聖道諸教爲在世正法、而全非像末法滅之時機。己失時、乖機也。淨土眞宗者、在世正法像末法滅濁惡群萌齊悲引也』(第三)。是れ時機の適不に就て、佛説の本意を明したまふなり。

又曰く、『竊以、聖道諸教、行證久廢。淨土眞宗、証道今盛也』(第四)。と茲に至りて、佛興世の本意、攝化益物の實を擧ぐるものは、獨り淨土眞宗なりと斷定したまへり。此法こそ最も高妙なれ。因人の能く企て測る所にあらず。之れを大經に、『二乘非所測、唯佛獨明了』と説たまへり。(初句の二乗とは聲聞、菩薩をいふ、次句に唯佛明獨了と、のたまふ故に、而して緣覺を聲聞に攝するもの、益なるものなり。)且つ此益こそ極めて寛廣なれ、經に『十方諸有』と説き疏に『五乘齊入』と釋す。然れば前來幾疊の簡別を以て、撰擇したるところを、詳密に稱示する時は、佛説(外道に簡らふ)大乘(小乘に簡らふ)無上(三乘に簡らふ)淨土(華天に簡らふ)眞實(西鎮に簡らふ)宗旨とも簡言すへきなり。略して淨土

真宗といひ、最要に約して真宗といふ。問て曰く。第一法即ち横判に由りて、撰取せられたる真宗と、第二法の堅釋に由りて、究了せられたる真宗と、其法体の同異如何。

答て曰く。全同無別なり。而して前者は、能簡所簡の上に於て取捨を存す、是の故に、横簡撰擇といひき。後者は大小頓漸、聖淨眞假の四重對あるも、同一眞理中の精研なり。且つ圓かに三法印を具す、誰か此法を觀しつゝ、取捨の念を懷くことを之れ爲さん。仰ひて圓滿眞法として信するなり。彼れ即ち八面玲瓏の珠寶の如く然り。而して時と機とに依りて、其

入門の慎重に精研すへきものありて存す。是れ豎尋に四重對簡を設けし所以なり。即ち前に出したる宗名典據の四文中、第三に曰く『信知、聖道諸教、爲在世正法而全非像末法滅之時機、已失時乖機也。淨土眞宗者、在世正法像末法滅(時)濁惡群萌(機)齊悲引也』と。又第四に『竊以、聖道諸教、行証久廢。淨土眞宗、証道今盛也』と既に此祖判ありて分明なり、再讀して精研の規矩とすへし。夫れ聖道の因果は、しはらく正法の時機に適合するも、永く像末の時機に違背す。之れを和讃に、

『末法五濁ノ有情ノ行証カナハマトキナレハ、』

釋迦ノ遺法、コトノク龍宮ニイタマヒニキ』
 とのたまへり。然るに彌陀の本願、三時常恒に行な
 はる。これをまた和讃に、

『正像末ノ三時ニハ、彌陀ノ本願ヒロマレリ、
 像季末法ノコノ世ニハ、諸善龍宮ニイリヌマフ』
 と併せ得て知るべし。

問て曰く。引文に依りて、教法の時機に適不あるこ
 と、略ほ了解するを得たり。然れとも同一珠寶の如
 き佛法の、何故に時機に依りて大小、頓漸、等、斯くも遠
 く分るゝものなりや、其所由未だ詳かならず、請ふ近
 喩に寄せて顯す所あれ。

答て曰く。古歌に『わけのほるふもとの道はおほけ
 れど、おなじたかねの月をながめん』と。これ其能證
 の方法は八万四千に分れとも、所證の目的は同一佛
 果なることを證したるなり。又聞く、『白露のおのが
 すがたをそのまゝに、紅葉におけはくれなひの玉』と。
 それ金天降す所の白露、宛然無垢の珠玉たり。而も
 これを蓮葉に安けは、瑠璃と疑はしめ、若し楓葉に移
 せは瑠璃を欺く。此れに由りて之れを觀れば、佛は
 唯、法界等流の説法なれども、之れを所化の大衆に施
 したるとき、『大、小』『頓、漸』『半、滿』『權、實』ついに八万四
 千の法門となる。佛既に此事を説示したまへり。

(八三)

曰く『佛以一音演說法、衆生隨類各得解』と。上來の法、
喩相照して、其光景を察知すべし。

問て曰く。堅門時間に、正、像、末の三期あるが如きは、
目前物質的文明の、日に月に開進し行くにも拘らず、
精神的道徳の年一年と退歩するにても、其了解には
躊躇せず。されど尙ほ横線同時に、佛説の會下に列
する大衆中、頓を聞き、漸を聞く等の不同あり。今日
みす／＼廢退に趣きつゝある、聖道教をなほも追慕
する徒あり。又時機相應の淨土法を歡迎する輩あ
り。これなほ疑團の殘れるものなり。同一正法乃
至末法の時機にして、何故に斯くの如き不同を見る

や。

答て曰く。他なし、宿善の厚薄に因る。

問て曰く。宿善とは何ぞ。

答て曰く。名稱の如く、宿昔に積累せし、善根てふ意
味を表示したるものなり。

問て曰く。其宿善を如何にして、吾人が心中に積累
せし乎。

答て曰く。正式にこれが解釋を爲さんとするとき
は、聖教量に攀縁して、汎爾の宿善、又係念の宿善等そ
の義相を詳説すべきなり。今は唯、そが吾人の、もの
となりたる模様を、平易に辨述すれば足る。凡そ宿

(九三)

善とは、宿昔即ち今生より云へば前生に於て、又今日より云へば昨日、惣へて今より過去に屬する時間中に在りて、すでに積み蓄へられたる善根をいふ。聖教中に三恒値佛の説あり、即ち幾多の佛陀に値ひたてまつりて、聞き得たる法徳の、心識に熏染せられて、存在するものを云ふ。

問て曰く。其宿善何に由て厚薄相ひ分るゝや。

答て曰く。侍佛の親疎敬侮より、聞法の信謗順逆に至るもの、漸く積りて、此二類を見る。試みに思へ其初めや手を携へて、饗門に入りし兒童の從學時間の勤惰に分割せられて、其終りや、一は宰相となりて廟

堂に立ち、他は馬丁となりて紅塵を排す。夢幻の一世すら猶ほ此の如し、况んや曠劫已來の積累を以てまた盡未來際に向はんとす、宿善の關係豈に長遠廣大ならずや、又何ぞ恐れ慎まざるへけんや。

問て曰く。何を苦みて斯く恐れ且つ慎めといへるや。

答て曰く。看よ、彼の西山の善慧坊性空、鎮西の聖光房辨阿の如きを。彼等皆な黒谷門下の龍象たり。深智博覽斯くの如き人にして、眞實の信花ついに開敷せずして逝けり。之れに反して法力又は明法の徒、頑痴暴惡、絶て倫なき者、容易に本願の大道に入る、

(一四)

何ぞ其表面の不準序なる、蓋し彼等は身を提げて、宿善の厚薄を余輩に教示したる權化と知らる。問て曰く。諸佛の證果と彌陀の證果と同なりや、異なりや。若し全く同等なりと云はし、諸佛に依りて顯はれたる法は、時に三時の優等劣を分ち、機に上中下を論すれども、彌陀法獨り時機を簡はずと云ふに非ずや。此れに由りて若し差別あるものと云はし、同一佛果の聖訓を奈何せん。答て曰く。善哉問や。余が將に辨述せんとする要義なれば、謹で此義相を答ふへし。若し夫れ所顯の理より云へは、すなはち彌陀、釋迦、諸佛同等なり。猫

(三四)

も杓子も亦同一眞如なり、何ぞ各種あるべきものぞ。然るに其能顯の事、すなはち諸佛各々其願行一様ならず。况んや彌陀成佛の因縁に至ては、諸佛如來と其別霄壤も啻ならずなるなり。是れを明すを第二の法相門とす。而して其法相を明し了れば、阿彌陀佛の別德獨り、諸佛の光明を映奪すること、満月の衆星中に在るの概あり。此彌陀一佛に至心歸命する、之れを眞宗の安心門とす。是等二大門の詳細、序を逐て以下之れを陳述せんとす。夫れ先つ

法相門

とは、

問て曰く。前段結尾の答意に依れば、浄土真宗の法相、優に諸佛普通の願行に超異せる阿彌陀佛の悲願に淵源すと斷せらるゝものゝ如し。果して然るか、謂ふ其詳説を聞かん。

答て曰く。善哉問也、以下辨述する所あらん。夫れ吾が見真大師が立教開宗の本典六軸を撰述し、其第二の行卷に在りて、善導大師の往生禮讚を引証したまふ。其文中左の言あり曰く。

『彌陀世尊、本發深重誓願、以光明名號攝化十方。但使信心求念上盡一形、下至十聲一聲、等以佛願力、易得往生。是故釋迦及以諸佛勸向西方、爲別異耳。』

と。斯く善導の釋文を引証したまふもの、即ち吾祖の御釋なれば、今彼の文意に由りて、以て此本典全部に留めたまふ祖意、即ち宗意を伺ふを適當とす。然れば則ち、真宗の法門は、全く彌陀超世の別願を源泉として、混々湧き出つること愈々分明なり。今其綱要より之を説かん。曰く二種廻向、曰く眞實四法。此二大綱要を提れば、一宗法門の細目は、総へて説盡すへきなり。而して其二種廻向とは、即ち往相還相にして、眞實四法とは、是れ教行信証なり。問て曰く。其往還と四法を、眞宗本典中に提示せられたる文所を指せ。

(六四)

答て曰く。六軸の第一教卷の初めに於て、左の數語あり。彼れ本典六軸の御起筆にして、亦是れ一大眞宗の基礎なり。其文に曰く。

『大無量壽經。』

眞實之教、淨土眞宗。

謹按淨土眞宗、有二種廻向。一者往相二者還相。就往相廻向有眞實教行信證。

夫顯眞實教者、則大無量壽經是也。斯經大意者、彌陀超發於誓廣開法藏致哀凡小選施功德之寶。釋迦出興於世光闡道教欲極群萌惠以眞實之利是以說如來本願爲經宗致即以佛名號爲經體也。須らく熟讀祖意を領得すべきなり。

(七四)

問て曰く。再三讀て猶ほ未た文意を通曉する能はず、請ふ二種回向と眞實四法の義由を述釋せられよ。答て曰く。往還とは、具さに之を往相還相といふ。すなはち吾人信者か、此迷ひつゝある障り多き世界を見限り、猶ほ煩惱に苦しめらるゝ穢身を蟬脱して、彼の安養無漏界に行き、且つ清淨光明の無垢身と生れ出つる其相貌を往相といひ。前壁に當りたる珠玉の還り來る如く、彼の國に於て、神力自在なることは、測量すへきことそなき、彌陀と等しく悟り現はしたる體徳より、此土に還り來りて、釋迦に同しき化用を現起するを還相といふ。此二種共に自力の成し

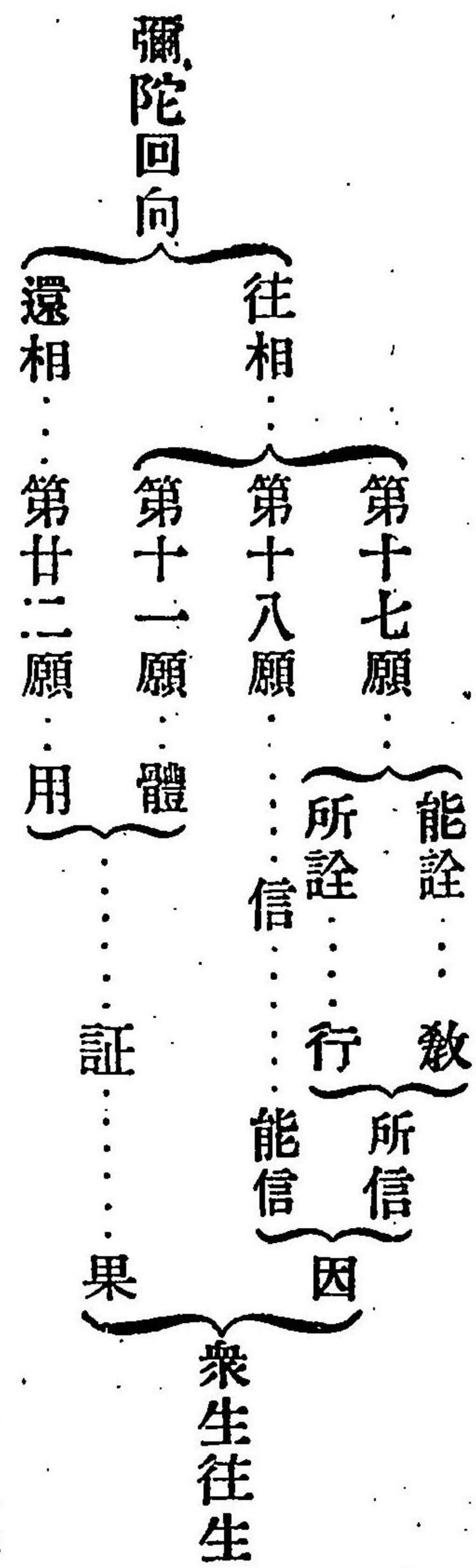
能ふべきことにあらず。全く彌陀他力の本願より成就したまひたる賜なれば、之を回向といふ。又教行信行の四法とは、『教』は即ち釋迦出世の本意より宣説したまひたる、大無量壽經の如き、眞實の教法をいふ。第二に『行』とは、彌陀の本願より成就したまひたる、南無阿彌陀佛の妙行是れなり。第三に『信』とは、彼の妙行即ち南無阿彌陀佛を所信として、其至徳の如く聞き得たる能歸の信順をいふ。換言すれば、本願の天上に輝きつゝある名號の信月、來りて行者宿善の水中に印現したるものをいふ。第四に『證』とは、彌陀本願念佛の由れを(行)聞き開きたる(信)淨土の大

菩提心を正因として、安樂佛國に於て、涅槃の妙果を開く(証)。斯れを之れ眞實の四法として、さきに出せし往相還相と一雙に、吾か眞宗の特得たる回向因果の二大法門とはするものなり。

問て曰く。二種回向と眞實四法の體相、畧ぼ領解せり。今更に回向と因果の相依りて、一宗の法門を組織する義相を聞かんと欲するなり。

答て曰く。回向門とは、能化の阿彌陀佛か、三世十方の諸佛に見棄てられたる、吾人群生を攝化したまふ所以を顯示する一大法門にして、淨土他力の名義茲に於てか起る。又因果門は、吾人所化か釋迦眞實の

教^〇法^〇(教^{第一})に依りて、彌陀本願の妙行^〇を聞信^〇し、速かに此の穢界を捨て、疾く彼の淨刹に生ずる、往相の因(第二行)果(証^{第四})なれば、吾人が出離生死に於ける無二の要門にして、淨土往生の正因正果、之れを措て他に求むべからず。然れば即ち前者は、能化の彌陀か、諸佛に超異せる、其の佛徳を稱揚する法門にして。後者は、所化の衆生か、定散の舊夢なる、邪定不定の區域を脱し、明信佛智の白道に出でたることを説示する法門なり。換言すれば、一は約法向下門、他は約機向上門といふべし。更に二種回向と四法因果の關係を略して圖出すれば左の如くなる。



斯くの如く、義相條然相分るべしといへども、衆生若し眞實四法の因果に律せられて、往生成佛の素懷を果遂せずんば、彌陀の大悲を奈何せん。而して此因果を彌陀他力の回向に仰かずんば、自力無功の群生、永劫に出難の期復たあることなし。是の故に、吾祖見眞大師、約法回向と約機因果の二大要義を顯示して、眞宗の法門としたまへり。

(一五)

問て曰く。真宗法門の組織的綱要、畧ほ之を領解することを得たり。是れ全く以上の答釋を煩はしたる結果として、深く感謝する所なり。請ふ以下一々其れか詳細を、解剖的に述釋せられんことを。

答て曰く。詳述は今の盡す所に非ず、否予輩の敢て爲すべきことにあらず。幸に往還回向文類の在る有りて、直ちに祖訓を聞くことを得、今爲めに全文を掲げん。

往相廻向還相廻向文類

往相廻向之文

無量壽經優婆提舍願生の偈に曰。云何廻向。不捨

(三五)

一切苦惱衆生、心常作願廻向爲首得成就大悲心故文。この本願力の廻向をもて、如來の廻向に二種あり。

一には往相廻向。二には還相廻向なり。往相廻向につきて、眞實の行業あり。眞實の信心あり。眞實の証果あり。眞實行業といふは、諸佛稱名の悲願にあらはれたり。稱名の悲願大經に言く。

『設我得佛十方世界無量諸佛。不悉咨嗟稱我名者不取正覺。』文眞實信心といふは、念佛往生の悲願にあらはれたり。信樂の悲願大經に言く。

『設我得佛。十方衆生至心信樂欲生我國。乃至十念。若不生者、不取正覺。唯除五逆謗法文。眞實証果と

いふは、必至滅度の悲願にあらはれたり。証果の悲願大經に言く。

『設我得佛國中人天。不住定聚、必至滅度、不取正覺文。これらの本誓悲願を選擇本願とまふすなり。これらを往相廻向とまふすなり。この必至滅度の大願をねこしたまひて、この眞實信樂をねたらん人は、すなはち正定聚のくらゐに住せしめんとちかひたまへり。同本異譯の如來會に言く。

『若我成佛國中有情。若不決定成等正覺、証大涅槃者、不取正覺』。文この悲願は、すなはち決定して、等正覺にならしめんと、ちかひたまへりとなり。等正覺と

いふはすなはち、正定聚の位なり。等正覺とまふすは、補處の彌勒菩薩と、おなしからしめんと、ちかひたまへるなり。しかれは眞實信樂の念佛者は、彌勒菩薩とおなしと、龍舒淨土文にあらはせり。しかれは、大經には『次如彌勒』とのたまへり。これらの大願を往相廻向とまうすとみねたり。二には還相向といふは。淨土論に曰く。

『以本願力廻向故是名出第五門』といへり。又曰く。

『生彼國已還起大悲廻入生死教化衆生亦名廻向也』といへり。これは還相の廻向ときこねたり。このころは、一生補處の大願にあらはれたり。大慈大悲

(六五)

の誓願は大經に言く。

『設我得佛他方佛土諸菩薩衆。來生我國究意必至一生補處。除其本願自在所化爲衆生故被弘誓鏡積累德本度脫一切遊諸佛國修菩薩行供養十方諸佛如來開化恒沙無量衆生使立無上正眞道。若不爾者不取正覺』文。この悲願は如來の還相迴向の御ちかひなり。これらを如來の二種の迴向とまうすなり。他力の往相還相の迴向なれば自利々他どもに行者の願樂にあらず大願より自然にうるなり。しかれば他力には義なきをもて義とすと大師聖人はおほせことありき。つく／＼この選擇悲願をこゝろにた

まふへしと。

南無阿彌陀佛

愚禿親鸞八十書之

康元元丙辰十一月廿九日

問て曰く。二種回向は祖訓によりて了知することを得て復た遺憾なし。尙ほ詳かにせんと欲ふものは直實四法にぞある。中に就て先づ釋迦一代の教法は悉く眞宗の法門を宣説したるものといふべき平。

(七五)

答て曰く。否他力眞宗の法門を信受奉行すへき時機の調熟せしとき授けたまふ隨自意眞實の經教は即ち淨土の三部經なり。此れを除きたる他の初頓

華嚴より終圓涅槃に至る諸經は、皆隨他意非眞宗といふべきなり。但し徐ろに調機弄引したまふ教法は、其所説の當相全く非眞宗なれとも、其説意の存する所却て眞宗に在り。此義邊に依らば、亦た云ふへし、淨土の三經は直接眞宗教にして、他は皆間接眞宗教なりと。若し此等のことを精研せんと欲せば、既に二雙四重の祖判あり、そは教相門に屬するを以て、第一門中に於て、其一班を出し置きぬ。

問て曰く。前きの説述に依るに、本典の御起筆特に『大無量經、眞實之教、淨土眞宗是也』等と。彼れすでに祖判なり。然るに今淨土の三部經を通して、皆直顯

眞實教とせらるゝもの、前後銚楯するかことし、云何か思釋すへき乎。

答て曰く。善哉問也、請ふ以下眞宗教、及餘の三法をも併せ舉て、夫に係る説明をなさしめよ。凡そ眞宗一家の法門に、二種の方面あり。曰く三經差別門、曰く三經一致門。今前きなるものに就て云へば、阿彌陀佛もと三世十方の諸佛に、見棄てられたる吾人群生を、順に漸に其機根の調熟を見て、攝化したまはんとの本意より、超世無上の誓願を立てたまふこと、四十有八ある中、特に第十八願に於て、先づ十方衆生と所彼の機を招喚し、其れに與ふるに、至心信樂の眞實

(六)

信心を以てしたまふ。是の故に、吾か祖師、此信心を詳述したまひし信卷(本典第三卷)にありて、開卷先つ『至心信樂之願』と。彌陀如來すてに發願して、信心を回向したまふ本源を標し。之を領受する機根を、其下とに『正定聚之機』として擧げたまふもの、其名稱自ら本願念佛の正行に背きたる邪定聚の機と、不思議の佛智に於て、未だ明了の信智生ぜざる不定聚に簡別して、正定聚とは立名したまひしなり。而して現在此界出現の釋迦、及び三世十方の諸佛、此機の爲めに大經を説きて眞宗を樹立したまふ、其相たを顯示したまふものを本典第一の教の卷とす。此釋迦諸佛

(六)

か、彌陀の第十七願に酬報して、稱揚讚嘆したまふ、其眞實教に依りて現はるゝものを、彌陀の妙行即ち南無阿彌陀佛として、之れを明すものを、第二の行卷とす。然れば則ち、教卷は即ち釋迦發遣の卷にして、行の卷は是れ彌陀招喚の卷とすへきなり。此二尊の大悲に緣りて、一心の佛因を獲たてまつる、其信心を詳説したまふものを、第三信卷とす。此眞實信心の正因に依りて、得る所ろの果、開く所ろの証りを、顯示したまひたるか即ち証卷なり。此証卷中より、能化所化、咸同一類の佛身佛土を、感得することを明したまひたるを、第五の眞佛土卷とす。非本願雜毒の行

を修する邪定聚と、又一向に彌陀本願の名號を稱ふとも、不思議の佛智を領得せざる不定聚との二機、遂に自力を捨て、他力に歸すべきことを明したまふを、第六の化身土巻とす。廣説此の如くなりといへども、其要彌陀本願成就の名號を、釋迦諸佛の稱揚讚嘆に依りて、吾人群生に聞信せしむれば、能事究竟す。其故は、第十七願にある所信の行は、眞實教に依りて顯はれ來りて、第十八願の下どに立つ所ろの、正定聚の信心海となる。其信心に依りて、往生成佛の妙果は成辨せらるるものなれば、正定聚の機を、信巻に置きて、化巻所出の邪定不定に對簡す。而して此邪定

不定は、もと第十八願に於て、十方衆生と招喚せられつゝ、信巻所明の如き正定聚となるに、機根未だ熟せざるもの是れなり。故に彌陀の本願行に迷ふもの爲に、更に十九願を起し、信に迷ふものを追ふて、復た二十の願を設けて、各十方衆生、また十方衆生と、兩重三重に慈網を施したまひて、あれは、吾祖亦化巻を開述して、周密に其機根の調熟を慈計したまふ、之れを三々の法門といふ。畧して圖出すれば左の如くなる。

三願——三經——三機——三往生

第十八願(彌陀) || 大經(迦釋) || 正定聚(衆生) || 難思議往生(土報)

第十九願(陀彌) 觀經(迦釋) 邪定聚(生衆) 雙樹林下往生(土化)
第二十願(陀彌) 小經(迦釋) 不定聚(生衆) 難思往生(土化)
之れか詳説を欲せば、また既に祖訓あり。左に其全文を拜録せん、反覆薫誦せば宗意掬すへきなり。
淨土三經往生文類に曰く。

大經往生トイフハ。如來選擇ノ本類不可思議ノ願海、コレヲ他カトマフスナリ。コレスナハチ、念佛往生ノ願因ニヨリテ、必至滅度ノ願果ヲウルナリ。現生ニ正定聚ノクラ_ニ住シテ、カナラス眞實報土ニイタル。コレハ阿彌陀如來ノ往相回向ノ眞因ナルカユヘニ、無上涅槃ノサトリヲヒラク、コレヲ大經ノ

宗致トス。コノユヘニ大經往生トマフス、マダ難思議往生トマフスナリ。コノ如來ノ往相回向ニツキテ、眞實ノ行業アリ、スナリチ諸佛稱名ノ悲願ニアラワレタリ。稱名ノ悲願ハ、大無量壽經ニノタマハク。
『設我得佛。十方世界、無量諸佛。不悉咨嗟稱我名者、不取正覺文』。

稱名信樂悲願成就文經言。

『十方恒沙諸佛如來。皆共讚嘆無量壽佛、威神功德不可思議。諸有衆生。聞其名號、信心歡喜、乃至一念。至心回向。願生彼國。即得往生、住不退轉。唯除五逆、誹謗正法文』。

(六六)

マタ眞實信心アリ、スナワチ念佛往生ノ悲願ニアラ
ワレタリ。信樂ノ悲願ハ大經ニノタマハク。

『設我得佛。十方衆生。至心信樂、慾生我國。乃至十
念。若不生者、不取正覺。唯除五逆、誹謗正法文。』

同本異譯無量壽如來會言。若我証得無上覺時。餘
佛刹中諸有情類。聞我名已。所有善根、心心廻向。

願生我國。乃至十念。若不生者、不取菩提。唯除造
無間惡業、誹謗正法及諸聖人文。』

マタ眞實証果アリ。スナワチ必至滅度ノ悲願ニア
ラワレタリ。証果ノ悲願大經ニノタマハク。

『設我得佛。國中人天。不住定聚、必至滅度者、不取正

覺文。』

同本異譯無量壽如來會言

『若我成佛。國中有情。若不決定成等正覺、證大涅槃
者、不取菩提文。』

無量壽如來會言

『他方佛國、所有衆生。聞無量壽如來名號、能發一念淨
信、歡喜愛樂。所有善根、回向願生無量壽國者、隨願皆
生得不退轉、乃至無上正等菩提、除五無間誹謗正法及
謗聖者文。』

必至滅度、証大涅槃、願成就文、大經言

『其有衆生、生彼國者。皆悉住於正定之聚。所以者何。

(七六)

彼佛國中無諸邪聚及不定聚文。
又如來會言

『彼國衆生若當生者。皆悉究竟無上菩提。到涅槃處。何以故。若邪定聚及不定聚。不能了知建立彼因故。』
コノ眞實ノ稱名ト眞實ノ信樂ヲエタル人ハ、スナラチ正定聚ノクラ非ニ住セシメムト誓タマヘルナリ。コノ正定聚ニ住スルヲ、等正覺ヲナルトモノタマヘルナリ。等正覺トマフスハ、スナハチ補處ノ彌勒トオナシクラ非トナルトキタマヘリ。シカレハ大經ニハ、次如彌勒トノタマヘリ。淨土論曰。

『莊嚴妙聲功德成就者。偈言梵聲悟深遠微妙聞十方

故。此云何不思議。經言若人但聞彼國土清淨安樂。剋念願生。亦得往生。即入正定聚。此是國土名字爲佛事。安可思議。至乃莊嚴眷屬功德成就者。偈言如來淨華衆。正覺華化生故。此云何不思議。凡是雜生世界。若胎若卵若濕若化。眷屬若干。苦樂萬品。以雜業故。彼安樂國土。莫非是阿彌如來正覺淨華之所化生。同一念佛無別道故。遠通夫四海之內皆爲兄弟也。眷屬無量焉可思議。又言願往生。本則三三之品。今無一二之殊。亦如溜瀾_{食陵反}一味焉可思議。又論曰。
『莊嚴清淨功德成就者。偈言觀彼世界相勝過三界道故。此云何不思議。有凡夫人煩惱成就亦得生彼淨

土、三界繫業畢竟不牽。則是不斷煩惱得涅槃分焉。可思議已上抄要。

コノ阿彌陀如來ノ往相回向ノ選擇本願ヲミタテマツルナリ。コレヲ難思議往生トマフス。コレヲコハロエテ他力ニハ義ナキヲ義トストシルヘシ。

二還相廻向トイフハ。淨土論曰。

『以本願力廻向故、是名出第五門』。

コレハ還相回向ナリ。一生補處ノ悲願ニアラワレタリ。大慈大悲ノ願大經ニノタマハク。

『設我得佛。他方佛土諸菩薩衆。來生我國究意必至。一生補處。除其本願自在所化、爲衆生故、被弘誓鎧、積』

累德本、度脫一切遊諸佛國、修菩薩行供養十方諸佛如來、開化恒沙無量衆生、使立無上正真之道。超出常倫諸地之行現前、修習普賢之德若不爾者不取正覺文。』
コノ悲願ハ如來ノ還相回向ノ御チカヒナリ。如來ノ二種ニヨリテ眞實ノ信樂ヲウル人ハカナラス正定聚ノクラ非ニ住スルカユヘニ他力トマウスナリ。シカレハ無量壽經優婆提舍願生偈曰。

『云何回向不捨一切苦惱衆生、心常作願廻向爲首得成就大悲心故』。

コレハ大無量壽經ノ宗致トシタマヘリ、コレヲ難思

議往生トマフスナリ。
 觀經往生トイフハ。修諸功德ノ願ニヨリ、至心發願
 ノチカホニイリテ、萬善諸行ノ自善ヲ回向シテ、淨土
 ヲ忻慕セシムルナリ。シカレハ無量壽佛觀經ニハ、
 定善散善三福九品ノ諸善、或ハ自力ノ稱名念佛ヲト
 キテ、九品往生ヲス、メタマヘリ。コレハ他力ノ中
 ニ自力ヲ宗致トシタマヘリ。コノユヘニ觀經往生
 トマフスハ、コレミナ方便化土ノ往生ナリ。コレヲ
 雙樹林下往生トマフスナリ。至心發願ノ願大經ニ
 言ク。

『設我得佛。十方衆生。發菩提心。修諸功德。至心

發願欲生我國。臨壽終時、假令不與大衆圍繞現其人
 前者、不取正覺文。』
 又悲華經大施品言。

『願我成阿耨多羅三藐三菩提已。其餘無量無邊阿僧
 祇諸佛世界、所有衆生。若發阿耨多羅三藐三菩提心。
 修諸善根、欲生我界者。臨終之時、我當與大衆圍繞現
 其人前。其人見我、即於我前、得心歡喜、以見我故、離諸
 障闕、即便捨身、來生我界文。』
 至心發願ノ願成就文大經言。

佛告阿難。十方世界、諸天人民。其有至心願生彼國、
 凡有三輩。捨家棄欲、而作沙門。發菩提心、一向專念

無量壽佛。修諸功德，願生彼國。此等衆生，臨壽終時，無量壽佛與諸大衆，現其人前。至阿難，其有衆生，欲於今世見無量壽佛，應發無上菩提之心，修行功德，願生彼國。佛語阿難。其中輩者。十方世界，諸天人民，其有至心願生彼國。雖不能行作沙門，大修功德，當發無上菩提之心，一向專念無量壽佛，多少修善，奉持齋戒，起立塔像，飯食沙門，懸繒燃燈，散華燒香。以此回向，願生彼國，其人臨終，至具如真佛，與諸大衆，現其人前。佛告阿難。其下輩者。十方世界，諸天人民。其有至心欲生彼國，假使不能作諸功德，當發無上菩提之心，一向專意，乃至十念，念無量壽佛，願生其國。若聞深法，歡喜信

樂不生疑惑，乃至一念念於彼佛，以至誠心。願生其國。此人臨終，夢見彼佛，亦得往生。功德智慧，次如中輩者也。已上略抄。

大經言

設我得佛。國中菩薩，乃至少功德者。不能知見其道。場樹無量光色，高四百里者，不取正覺文。道場樹願成就文經言。又無量壽佛，其道場樹，高四百里，其本周圍五十由旬，枝葉四布二十万里，一切衆寶自然合成。以月光摩尼，持海輪寶衆寶之王，而莊嚴之，周匝條間垂寶瓔珞，百千萬色，種々異變，無量光炎，照耀無極，珍妙寶網羅覆其上。

至乃一切皆得甚深法忍住不退轉至成佛道。六根清徹無諸惱已上略出。首楞嚴院要集引感禪師釋イハク。

問。菩薩處胎經第二說。西方去此閻浮提十二億那由他、有懈慢界。至乃發意衆生。欲生阿彌陀佛國者、深著懈慢國土、不能前進生阿彌陀佛國、億千萬衆時有一人能生阿彌陀佛國云云。以此經準難、可得生。答。群疑論引善導和尚前文、而釋此難。又自助成云。此經下文言。何以故、皆由懈慢執心不牢固。是知雜修之者、爲執心不牢之人、故生懈慢國也。若不雜修、專行此業、此即執心牢固、定生極樂國。至乃又報淨土生者極

少。化淨土中生者不少。故經別說實不相違也已上畧抄。コレヲノ文ノコ、ロニテ、雙樹林下往生トマフスコトヲ、ヨク、コ、ロエタマフヘシ。彌陀經往生トイフハ。植諸德本ノ誓願ニヨリテ、不果遂者ノ眞門ニイリ。善本德本ノ名號ヲエラヒテ、萬善諸行ノ少善ヲサシオク。シカリトイエトモ、定散自力ノ行人ハ、不可思議ノ佛智ヲ疑惑シテ、信受セズ。如來ノ尊號ヲオノレカ善根トシテ、ミツカラ淨土ニ回向シテ、果遂ノチカヒヲタノム。不可思議ノ名號ヲ稱念シナカラ、不可稱不可說不可思議ノ大悲ノ誓願ヲウタカフ。ソノツミフカクオモクシテ、七

質寶牢獄ニイマシメラレテ、イノチ五百歳ノアヒダ、自在ナルコトアタハス。三寶ヲミタテマツラス、ツカヘタテマツルコトチシト、如來ハトキタマヘリ。シカレトモ、如來ノ尊號ヲ稱念スルユヘニ、胎宮ニトマル。德號ニヨルカユヘニ、難思往生トマフスナリ。不可思議ノ誓願疑惑スルツミニヨリテ、難思議往生トハマフサストシルヘキナリ。植諸德本願文大經言。設我得佛。十方衆生。聞我名號。係念我國。植諸德本。至心回向。欲生我國。不果遂者。不取正覺文。同本異譯無量壽如來會言。若我成佛。無量國中、所

有衆生。聞說我名。以已善根。回向極樂。若不生者。不取菩提文。願成就文經言。其胎生者。所處宮殿。或百由旬。或五百由旬。各於其中。受諸快樂。如忉利天上。亦皆自然。爾時慈氏菩薩白佛言。世尊。何因何緣。彼國人民。胎生化生。佛告慈氏。若有衆生。以疑惑心。修諸功德。願生彼國。不了佛智。不思議智。不可稱智。大乘廣智。無等無倫最上勝智。於此諸智。疑惑不信。然猶信罪福。修習善本。願生其國。此諸衆生。生彼宮殿。壽五百歲。常不見佛。不聞經法。不見菩薩。聞聖衆。是故彼國土。謂之胎生。彌勒當知。彼化生者。智慧勝故。其胎生者。皆無智慧。佛告彌

勒。譬如轉輪聖王有七寶牢獄種々莊嚴張設牀帳懸
諸繒幡若諸小王子得罪於王輒內彼獄繫以金鎖_上。
佛告彌勒。此諸衆生亦復如是。以疑惑佛智故生彼
胎宮。至_乃若此衆生識其本罪滋自悔責求離彼處。至_乃
彌勒當知。其有菩薩生疑惑者爲失大利_{已上}。
又無量壽如來會言

佛告彌勒。若有衆生隨於疑悔積集善根希求佛智普
編智不思議智無等智威德智廣大智。於自善根不能
生信。以此因緣於五百歲住宮殿中_上。阿逸多汝觀
殊勝智者彼因廣慧力故受彼化生於蓮華中結跏趺座
汝觀下劣之輩。至_乃不能修習諸功德故無因奉事無量

壽佛。是諸人等皆爲昔緣疑悔所致。至_乃佛告彌勒。
如是。若有隨於疑悔種諸善根希求佛智乃至廣大智_上。
於自善根不能生信由聞佛名起信心故。雖生彼國於
蓮華中不得出現。彼等衆生。處華胎猶如園苑宮殿
之想_{已上}。光明寺釋云。

含華未出或生邊界或墮宮殿。已_上懺與師云。由疑佛
智雖生彼國而在邊地不被聖化事。若胎生宜之重捨
_上已。

コレヲノ真文ニテ難思往生トマフスコトヲヨク
コノコエサセタマフベシ。

康元二年三月二日書寫之

愚禿親鸞五十八歳

此祖釋に依りて、また立教開宗の祖意を窺知り、不了佛智の疑惑を廢して、明信佛智の信心を立し(能修に就きて廢立を示)。万善自力の雜行を廢して、威神功德の念佛を立す(所修の法に就きて廢立を明す)。彼の方便化土の果を、未だ感起せざる現生聞信の下とに於て、報土得生の正因を決得せしめ(所得の果に就て報化の得失を説)。以て撰擇(陀)廢立(迦釋)の佛意に相應し、佛恩に酬答せんとしたまへるなり。宜なるかな、宗祖は本典總結に、此真意を漏らして、『信順爲因(正定聚の機に就く)。疑謗爲緣(邪不二機に就く)』とは約言したまひたり。此廢立の正意に居し、安心立命することを、本と

して勸示したまふを吾宗の一流とす。以て惟ふに、一宗の教相門は、外か諸宗派、諸學派に簡別せんとし、對外的横超他力の一門を開闡するものなり。此時は本典全部を擧げて之れに當る。次に法相門は、内チ本典中に明す所ろの二種回向、眞實四法を以て、向內的に一宗の組織を示すものなり。又安心門は、吾祖師が殊に信卷に諸義を收攬して、祖師と遺弟と、一第十八願の下とに正定聚なる團座を占め、近く現生不退を慶喜し、遠く當得涅槃を歡喜することを之れ爲さんとしたまへり。されはこそ、此信卷に限りて、特別に破邪(廢)顯正(立)意の序文を添へて、若し時に

これを別行すれば、信心爲本の安心門能く設立し得べしと、自信したまひたる祖意、茲に於て明かなり。七百年後の今日、果然宗祖が擇法眼の鑑知したまひたる如くなりしといふ者非乎。以下専ら一宗安心の意旨を談るべし。

安心門

問て曰く。眞宗の安心は如何して發起するものなりや。

答て曰く。彌陀本願の謂れを聞き開きたるとき、安心はすてに樹立したるなり。

問て曰く。請ふ先づ彌陀本願の謂れより聞かん。

答て曰く。本願四十八の多きを見る、一々其誓ひたまふ所ろの願事を算へ來れば、日も亦た足らず。而も之れを第十八の王本願に總攝して、信心成就の本願とし、此願意を領得したる者をこそ、吾人が眞實報土、即ち彌陀の御邦に往生すへき正因とは定むるなれ。

問て曰く。本願総して六八に通するを、殊に第十八に據り、願事分て三(信心、念佛、往生)あれども、別に信心を取りて勤むること其指教ありや。

答て曰く。すてに祖訓の在るあり、即ち信卷最初に此事を標擧しのためひき、曰く。

『至心信樂之願、正定聚之機』

と。此願は即ち信心回向の本源にして、機は是れ不思議の佛智を信智したる、眞實信心の行者とす。是の故に蓮師も亦御文五帖五通に、

『信心獲得ストイフハ、第十八ノ願ノコ、ロウルナリ』と傳示したまへり。一家の指教斯くの如し、何そ多文を要せん。

問て曰く。一宗相傳の指教、謹て遵奉すへし。請ふ其第十八の謂れを詳述して、眞宗正意の信念を確立せしめよ。

答て曰く。先つ願文を擧げ、隨て其文義を釋し、以て

宗意に説到せん。夫れ第十八願の經文に言はく。

設我得佛。十方衆生。至心信樂、欲生我國。乃至十念。若不生者、不取正覺』

と。今謹て之れか文義を隨釋せば、『設シ我レ佛ヲ得

メラシニ』とは、阿彌陀佛の昔し法藏比丘たりしとき、

造惡(無間)不善(永不成佛)の故を以て、三世十方の諸佛如

來に見限られたる、吾人群生の爲めに、彌陀獨り、諸佛

に超異(光明破關名號滿願)せる本願を發起し(五切思惟)、終に其大願

に酬報する大行(永劫修行)を成就して、南無阿彌陀佛とい

ふ正覺を稱へんと、希有の大弘、誓を超發したまひき。

蓮師、此發願の所由を、吾人に告げたまわんとして、御

文に、

『アレタスクスノハ、マタイツレノ佛ノタスクタマハ
シントオホシメシテ』

と仰せ遺されたり。されは、此『設我得佛』の一句を、卑
近に陳述すれば、煩惱を止め、善根を作せとある、根機
不相應の諸佛本願に異りて、光明を以て迷ひを離れ
しむる、破闇の徳を具へ、名號を以て悟りに入らしむ
る、滿願の益を與へたまふ。斯の名義圓備して、南無
阿彌陀佛といふ正覺を取りたらしむといふ、御誓ひに
であるなり。『十方衆生』とは機類の善惡を問はず、一
切の群生を取りて、所被としたまふ。是れ廣く十方

に對機を招喚しつゝ、殊に諸佛の悲願に漏れ果てた
る逆惡を、攝化せんとしたまふ悲願の正意、茲に於て
窺ひ得らるゝ所なり。

『至心信樂、欲生我國』とは五劫思惟の御心ろに、眞實(至)
智慧(信)慈悲(欲生)我國(我國)の三徳を具へて、吾人に施與し、報
土往生の眞因たらしめんとする誓願なり。之れを
吾祖は、和讃に、

『至心信樂 欲生ト、 十方諸有ヲス、メテソ、
不思議ノ誓願アラハシテ、 眞實報土ノ因トスル、』
とのたまへり。

『乃至十念』とは、永劫に修行成就したまひたる、南無阿

彌陀佛の妙行に総ての功徳を圓滿しあれば、衆生能稱の多少を問はざる程を、乃至の御言はに抱持しつゝ、回向したまふ正行なり。以上の三信十念、之れを再述すれば、有漏雜染の群生に代りて、思惟修行したまひたる、無漏清淨の智心悲行、二つなから之れを回施したまふ相たなり。

『若不生者、不取正覺』とは、信して稱ふる正因、應に往生成佛の正果を得せしむへし。若し以上の立願にして、其約違ふことあらば、管に衆生往生の事ならざるに止まらず、吾亦た正覺を取らざるへしと、誓ひたまひしなり。されば『若不生者』は所化の往生に就き、『不

取正覺』は能化の正覺に約す。且つ二共に遮詮の所明なり。前來の散説を略攝して、一の縮圖にするときは、左の如くなる。



之れを彌陀の智願とす。故に吾祖、和讃に、

『彌陀智願ノ廣海ニ』

と仰せられ。衆生若し此智願を信受すれば、亦た是れを『信心ノ智慧ニイリテコソ』と示さるゝ。されは此信心を、吾人が佛智を受得したるものと云ふへくまた彼の佛智來りて、此信心となりたるものども云ふへきなり。此故に宗祖の信卷(本丁)は向上的に、

『斯心即是出於念佛往生之願』

とのたまひ、覺祖の最要鈔には、向下的に、

『コノ佛心ヲ、凡夫ニサツケタマフトキ、信心トイハルハナリ』

とのたまへり。斯の如く彌陀の佛智を、吾人の心田に下すときは、他日復た彌陀と同じき佛果を開出す

へし。之れを和讃に、

『大信心ハ佛性ナリ、佛性スナハチ如來ナリ、』

とのたまひき。例へは文學に熟達せる教師の薰陶を受けたる學生は、また終に文學士となり。醫學を授けられたる學生は、まさに醫學者となるが如し。

今彼の法藏大士が、吾人にかはりて超世の大願を發起したまふすなはち五劫思惟の智願なり。また無上の大行を成就せり、是れ永劫修得の悲行なり。此智願悲行、併せて吾人に施與したまはんとは、第十八の願事なれば、其誓約を立てたまひし、阿彌陀佛をたのみ、其佛願を信すれば、吾人の心田に、法藏の心行は、

全く附植せられたるものといふべきなり。之れを
正定聚の菩薩とす。此菩薩他日彼の安養國に往生
して佛果を開くこと、また法藏が彌陀となりたまひ
しと、其因果は好一對と云はるべきなり。斯間豈に
疑を容るべき餘地あらんや。故に吾見真大師淨土
真宗を開示するに當りて、殊に他力(回向)信心(因果)
と云ふ、一大法幢を翻へしたまへり。余輩は此大勢
に順せんとするものなり。

明治三十五年六月十一日印刷
明治三十五年六月十二日發行

(非賣品)

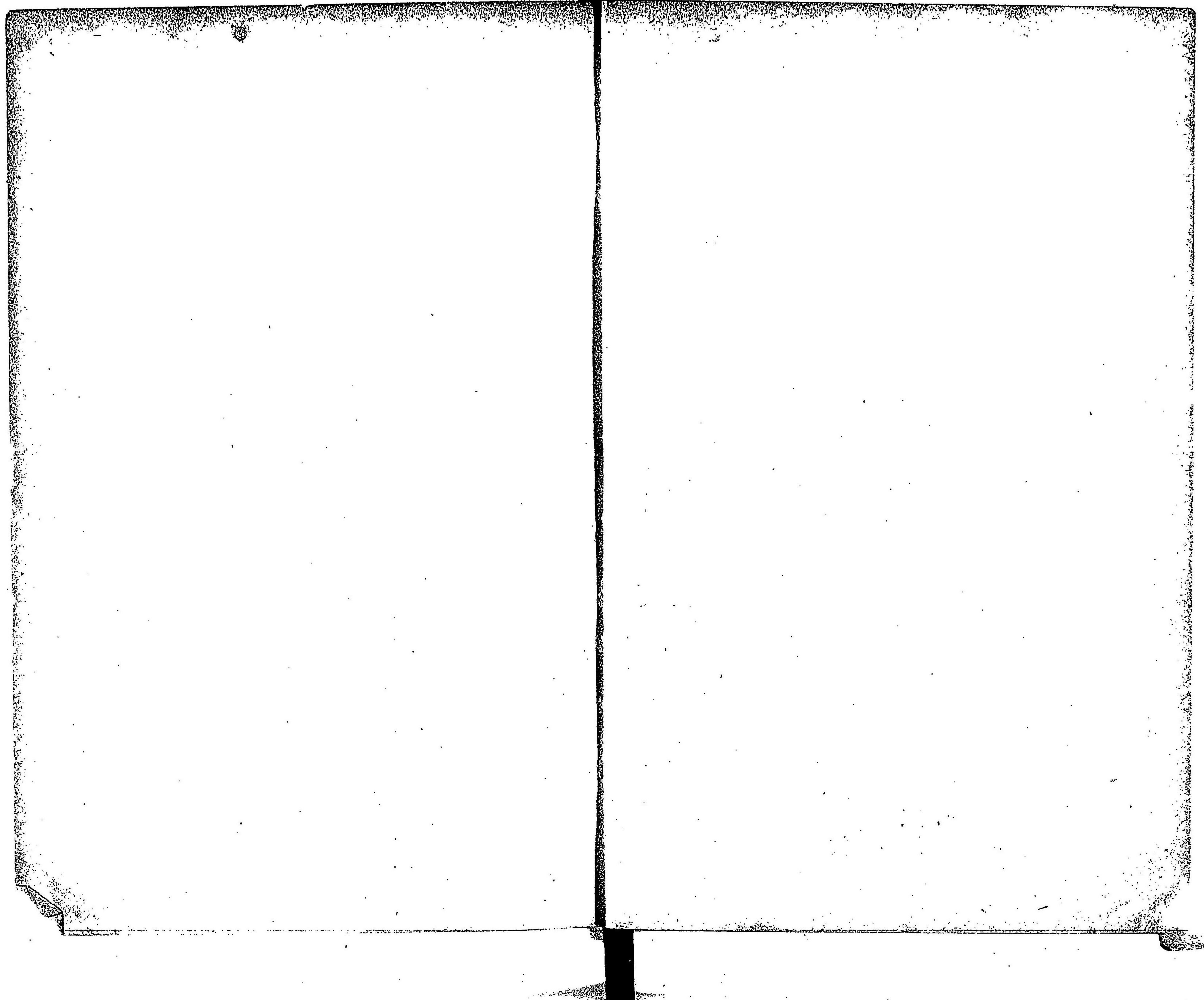
石川縣金澤市鍛冶町長徳寺住職
著作兼發行者 朝 倉 了 昌

石川縣金澤市谷町三番地
印刷者 上 田 金 信

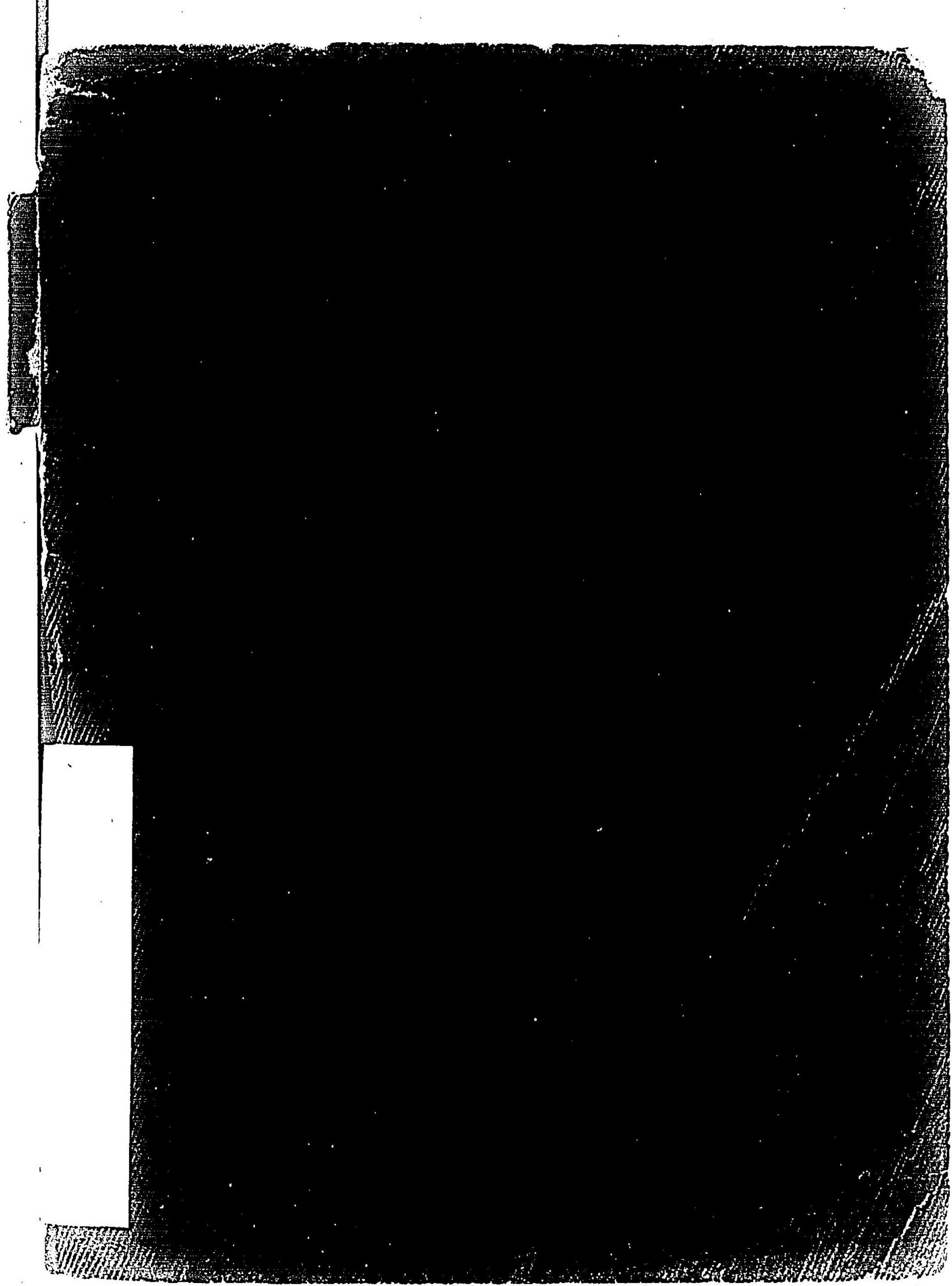
石川縣金澤市十間町壹番地
印刷所 金澤商況社工場

石川縣金澤市彦三七番丁五十九番地

發行所 白 毫 館



94
49



94

49

310141-000-0

94-49

是我真宗 增補訂正

朝倉 了昌 [述]

井口俊了、鹿野久恒 輯録

M35

